千鳥ヶ淵

第 563 号

公益財団法人 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

〒102-0075 千代田区三番町２
電話 03（3261）6700
ＦＡＸ 03（3261）6712

http://www.boen.or.jp
郵便振替口座 00140-2-42556

編集人 榊枝 宗男
発行人 杉本 順則

記録的な猛暑が続く夏
「戦没者に感謝と尊敬」遺族ら手を合わせ

終戦の日の15日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑には先の大戦で亡くなった英霊を慰めようと大勢の人が訪れ、墓前では早朝から日が傾くまで参拝者の行列ができた。台風７号の影響が心配されたものの例年並みの参拝者数となった。若者から戦没者の遺族まで幅広い世代が手を合わせた。

８月14日から15日には、毎年終戦の日に行われる「全国戦没者追悼式」に併せて上京した多くの遺族会による参拝が行われたが、大型台風の影響を受けながらも遺族会による参拝者数は昨年よりも増加した。全国戦没者追悼式の前日にあたる14日には、宮崎、佐賀、熊本、福岡、長崎、鹿児島、広島、香川、高知、大阪、鳥取、石川、山形、青森県の遺族会による参拝があった。各府県知事、遺族会などから例年通り多くの供花の依頼があり、終戦の日の戦没者慰霊に相応しい姿を維持できた。

15日には、奈良県、大分県遺族会の他、昨年と同様に多くの個人参拝者が訪れた。また、全国戦没者追悼式に先立ち、岸田文雄内閣総理大臣をはじめ松野博一官房長官、加藤勝信厚生労働大臣、西村明宏環境大臣、谷公一国家公安委員長等の閣僚や多くの国会議員による参拝があった。なお、鈴木俊一奉仕会会長が、岸田総理はじめ主要閣僚の案内役を務めた。

参拝するご家族（5.8.15）

東京都在住の太田康和さん（74歳）は「8月15日だけではなく普段からここに眠っている人のことを思い出してほしい。終戦の日などの機会に参拝してもらえれば、戦没者も喜ぶでしょう」と語った。

記録的な連日の猛暑にもかかわらず、多くの参拝者を迎えることができた。また、この秋以降にも多くの団体による慰霊行事が計画されており、引き続き、個人会員の皆さんや関係団体による参拝をお願するところである。

岸田総理大臣の全国戦没者追悼式式辞抜粋（武道館）

今日のわが国の平和と繁栄は、戦没者の皆さまの尊い命と苦難の歴史の上に築かれたものであることを、私たちは片時たりとも忘れません。改めて、衷心より、敬意と感謝の念をささげます。いまだ帰還を果たされていない多くのご遺骨のことも、決して忘れません。国の責務としてご遺骨の収集を集中的に実施し、一日も早くふるさとにお迎えできるよう、引き続き、全力を尽くして参ります。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この決然たる誓いを今後も貫いて参ります。いまだ争いが絶えることのない世界にあって、わが国は、積極的平和主義の旗の下、国際社会と手を携え、世界が直面する様々な課題の解決に、全力で取り組んでまいります。終わりに、今一度戦没者の御霊に平安を、ご遺族の皆様にはご多幸を、心よりお祈りします。

墓前へ向う岸田総理と鈴木会長

阿含宗関東別院 太平洋戦争戦没者供養 護摩法要千鳥ヶ淵万燈会

７月15日、阿含宗によるフィリピン戦域護国のご英霊への万燈供養として千鳥ヶ淵万燈会が営まれた。本慰霊法要は平成６年以来行われており、戦没者の御霊に対して多数の万燈を献じるとともに、ご英霊の安らぎを祈り感謝の誠を捧げるために執り行われている。護国のご英霊帰国式として「護国のご英霊御霊依代」の入場では参列者全員が起立して日の丸の小旗を手に力の限り振り、ご英霊にご帰国を歓迎する姿に心を打たれる。コロナ禍の昨年より参加者等の規模を約６５０名に拡大して執り行われ、会場には全国から信者の思いを込めた万燈が設置された。午後６時半、３０００個以上の万燈が点灯される中、導師清川靖法中僧正が入堂し式典が始まった。法要では国歌斉唱、喇叭保存会による「国の鎮め」吹奏に続き、護摩法要が開始され、六角堂内では護摩が焚かれ、真っ赤な炎の中真言が唱和された。その後、映画上映に引き続き、来賓祝辞として奉仕会理事長が挨拶を行い、続いて太平洋戦争戦没者慰霊協会秋上業務執行理事が挨拶した、引き続き阿含宗本庁　和田理事長は、フィリピンにおける護摩法要に参加された女性のお話を紹介され、「出征して戦没された父上とは会ったことはないが、このマニラにきて初めて父親の存在を感じることができた。また、阿含宗が世界平和を実践する団体です」と述べ、戦没者慰霊継続への強い意志が披露された。その後、奉納演奏として終戦当時の歌謡曲「東京ラプソディ」、「ああモンテンルパの夜は更けて」などを高らかに歌い鎮魂喇叭吹奏として「海ゆかば」、「ふるさと」が吹奏奉納として行われた後、喇叭保存会による鎮魂喇叭「消灯」、「巡検」が奉納吹奏として行われ法要は終了した。法要終了後には、参拝者全員が焼香した。なお、本法要は奉仕会のインターネット回線を利用して生中継された。

新日本宗教青年会連盟主催による戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典

８月14日、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）主催による「第58回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」が約１００名の青年会会員等が参加して執り行われた。

式典は午後６時に開始され、新宗連青年会宮本泰克委員長による挨拶の後、参加10教団による教団別の拝礼、平和へのメッセージ、平和の祈り（黙祷）の順で行われた。代表挨拶として新宗連石倉寿一理事長が挨拶（代読）をした。なお、本法要は昨年に引き続きインターネットによるライブ中継が行われた。

宮本委員長は挨拶において「約３年半に及ぶ新型コロナウイルス感染症への対応は、新たなステージへと移行し、徐々に日常が戻って参りました。本日も、新宗連の加盟教団代表者、青年会の代表者が、ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑にご参集下さいました。また今年も、新宗連の内外、全国から多くの皆様が、視聴を通してご参加くださっておりますことに、厚く御礼申し上げます。さて、私たちが『8・14式典』と並び二大行事と位置付けているユースフォーラムは、４月に北海道で、アイヌ民族と共生をテーマに多様性を学びました。遡って２月には、４年ぶりとなる沖縄慰霊平和使節団を派遣しました。新宗連の先達の先生方は、『8・14式典』の祈りを原点に、沖縄、アジアへ慰霊使節団を派遣し、敵味方、怨讐を超えたすべての戦争犠牲者の慰霊と平和祈願、そして未来志向のより良い関係性の構築に取り組まれ、私たちに「新宗連青年会のこころ」を伝えて下さっています。

今回の沖縄使節団でご挨拶くださった沖縄の方は、今も続く基地問題や、国際的な紛争に触れ、『沖縄の戦後はまだ終わっていない。政治や社会状況が行き詰っている今こそ、宗教者、青年が未来を切り開いていってほしい』と期待を語ってくださいました。

真の世界平和を達成することは、もちろん簡単なことではありません。宮沢賢治が書き残したように『世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない』というのもまた真実でしょう。私たちに何ができるのかと自問し、無力感で苦しくなることもあります。インドのマハトマ・ガンジーの『平和への道はない。平和こそが道なのだ』という言葉を思い浮かべます。問い、求め続けること、小さなことでも一歩ずつ、できることを積み重ねていくこと、仲間を増やし、広げていくこと、何より宗教青年の私たちは、祈ること、これこそ私たちにできる『平和の道』でしょう。手を携え、前を向いて共に歩みましょう」と述べた。

なお、当日は本行事に先立ち、午後４時45分から新宗連所属会員である解脱会会員約１００名により独自の法要が執り行われた。

令和５年度千代田区戦没者追悼式

７月13日、千代田区主催の戦没者追悼式が、ご遺族等関係者約１５０名が

（第二面につづく）

あなたに夢を。街に元気を。 クーちゃん 宝くじ

この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

（第一面からつづく）

参加し行なわれた。夕闇迫る中、午後6時30分、開式の辞が述べられ、全参列者が起立する中、千代田海洋少年団による篝火（かがりび）点火が行われた。引き続き黙祷、国歌演奏が九段中等教育学校吹奏楽部により行われた。その後、樋口千代田区長が献花台に進み追悼の辞を述べた。樋口区長は「昨年2月に開始されたロシアのウクライナ侵攻は、現在も激しい戦闘が続き多くの子供、一般市民が犠牲となりました。千代田区は昨年3月には「国際平和都市千代田区宣言」のもと世界平和を実現するための行動として、ロシアの暴挙に対し抗議を表明致しました。今ある平和と繁栄は、戦禍の中で亡くなった多くの方々の犠牲とそのご家族の悲しみの上に築かれたものであることを忘れてはいけません。千代田区では過去の戦争の実相に触れ平和の尊さを実感してもらうため、毎年、沖縄・鹿児島、広島、長崎へ「平和使節団」を派遣しております。若い世代の皆さんが「平和の大使」として活躍していただけるよう期待しております」と述べた。続いて、秋谷こうき区議会議長が「現在の繁栄の陰には、祖国日本のために戦火をくぐり、家族を案じつつ、尊い命を失った数多（あまた）の人々の犠牲があったことを、私たちは決して忘れてはなりません。世界に誇れる平和日本の礎（いしずえ）となられた戦没者の皆様のご冥福（めいふく）を、ここに改めてお祈り申し上げます」と述べた。

引き続き吉川秀隆遺族会代表の追悼の辞「時代も昭和から平成へ平成から令和に変わった今日においても、なお多くの戦没者が各地に残されております。諸外国、厚生労働省、外務省、防衛省、各遺骨収集団体等の関係者の皆様の協力をいただきながら、いまだ各地に眠る戦没者の御遺骨が一日も早く故郷に戻られますよう願うものであります」があり、次いで平和使節団団員による「平和への決意」を再確認し、参加者全員による献花が行われ式典は終了した。

日蓮宗戦没者追善供養 並世界立正平和祈願法要

8月15日、日蓮宗主催の千鳥ヶ淵戦没者追善供養並世界立正平和祈願法要が執り行われた。午前9時、法要は柳下俊明日蓮宗伝道局長が墓前に着座して開始された。宗歌斉唱に始まり、道場偈、勧請、開経偈と続き、読経の際には参列者全員が焼香した。その後、修法、表白、唱題、回向、四誓、奉送と続き戦没者のご冥福をお祈りした。最後に導師である田中恵紳宗務総長の挨拶として「私達が生きるこの日常は、戦禍の犠牲となられた先人たちの命によって紡がれた、有り難き時間の積み重ねであることを自覚し、一人でも多くの人々が本来の姿に立ち戻って、尊き他者を敬い、慈しむことによって、恒久なる安寧すなわち世界平和が一日も早く実現されることをここに願うものであります。

結びに、本日ご参列くださいました、国会議員各位をはじめとする皆様方には、心より御礼申し上げ、この法儀が全ての命と、その希望を未来に繋げる縁（えにし）とならんことを切望し、ご挨拶とさせていただきます」と柳下伝道局長が代読し、法要は終了した。

妙智會教團戦没者墓苑うら盆供養

7月14日、妙智會教團主催の千鳥ヶ淵戦没者墓苑うら盆供養が約350名の参加者のもと行われた。午後1時、「玄題三唱」により式典が開始され、ブラスバンドが演奏する中、青年男女16名による献灯、献華、献供の儀が整斉と行われ、参列者の注目を得た。この後、宮本法嗣が入堂、献灯献花の儀、ご祈願、読経が厳粛に執り行われた。引き続きコーラス隊による唱歌「ふるさと」に引き続き「夕やけ小やけ」が奉唱された。この後宮本法嗣が本堂の中央に進み参列者全員に正対してご自身の言葉で「今行われているロシアのウクライナ侵攻のような争いは人の争いです。その争いの元は人の心です。戦没者うら盆を機に自分の心を一つ一つ改める修行をお願します」との力強い挨拶があり参列者の共感を得ていた。来賓代表として奉仕会理事長（代理）が挨拶を行い、その後全員が前屋にて焼香して式典は終了した。妙智會教團は戦没者墓苑が創建された翌年の昭和35年以来、毎年欠かさず、うら盆供養を行っている。

フォーラム平和・人権・環境 戦争犠牲者追悼、平和を誓う 8・15集会

8月15日、正午の黙祷に始まり、勝島一博フォーラム平和・人権・環境共同代表、近藤昭一立憲民主党衆議院議員、大椿ゆうこ社会民主党副党首、阿部知子立憲フォーラム副代表、内田雅敏戦争をさせない1000人委員会事務局長等による「誓いのことば」が述べられ、その後献花が行われ式典は終了した。勝島代表は「戦後78年が経過した今も地上では戦争がなくなることはなく、ロシアとウクライナの戦闘の中で、多くの尊い命が奪われるとともに町が破壊され、虐殺・拷問・暴行・略奪などの犯罪が報じられています。このことは、ひとたび戦争という極限状態では人は人でなくなり、軍隊は理性を失い想像を絶する残虐な行為に至ることを物語っています。かつての戦争の実相を忘れることなく継承するとともに、憲法理念の実現に向け立ち止まることなく平和の歩みを続けることをお誓いし、平和フォーラムを代表しての言葉といたします」と力強く述べた。

硫黄島から17柱のご遺骨の帰還 遺骨引渡し式を実施

8月10日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて本年度2回目となる遺骨引渡し式が行われた。今回の収集事業も硫黄島のみであるが、遺骨引渡し式は遺骨収集の都度実施される予定である。

今般収容、帰還されたご遺骨は17柱である。式典では、遺族会、その他関係者が待ち受ける中、遺骨収集団員に捧持されたご遺骨が式典会場に到着し、厚生労働省の職員に引き渡された。職員により祭壇に仮安置された後、全員による黙祷、次いで羽生田厚生労働副大臣、参列の国会議員、遺族参列者等の拝礼、献花が行われた。羽生田副大臣は遺骨収集団の解団式の挨拶の中で「硫黄島の遺骨収集は、2週間にわたり地下壕や大量の土砂に埋もれた場所でのご遺骨の捜索など、大変、厳しい作業の連続であったと伺っております。硫黄島における遺骨収集は、政府一体となって取り組むため、関係省庁会議において決定された基本方針に基づき進めております。今後とも、多くのご遺骨を一日も早くお迎えできますよう、防衛省等の関係省庁日本戦没者遺骨収集推進協会をはじめとした多くの皆様にご協力を頂きながら遺骨収集事業に全力を尽くす所存です」と述べた。

今回の派遣団員（写真）の構成は、日本戦没者遺骨収集推進協会6名、日本遺族会6名、硫黄島協会1名、小笠原村在住硫黄島旧島民の会5名、JYMA日本青年遺骨収集団2名、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会2名、国際ボランティア学生協会2名、水戸二連隊ペリリュー島慰霊会2名、隊友会2名総計28名であり、他には厚生労働省2名、小笠原村職員1名、重機オペレーター3名が同行支援した。

私たちが思う戦没者慰霊について 【投稿①】『英霊の絶叫』を読んで

沼野　凌子

令和5年5月中旬、パラオ共和国南部、アンガウル島での遺骨収容に参加した。日本からは時間にして約7時間半、直線距離にして約3200㎞離れた小さな島、アンガウル島。島はさまざまなトーンの青い海に囲まれており、かつて大勢の日本兵が命を落とした凄惨な戦場だったとは想像もつかないほど、静かで美しい。私が遺骨収容を行ったのは島北西部の「ヒナンバ（避難場）」と呼ばれるジャングルだったが、そこにはまだまだ多くのご遺骨が人知れず残されたままだった。

私は2019年末にJYMA日本青年遺骨収集団（以下、JYMA）に入団した。学部生の頃の専攻がフィリピン語だったこと、幼い頃から兵士の手記を読むことに関心を持っていたことから、大東亜戦争に関連したテーマで卒業論文を執筆したいと漠然と考えていた。そこでさまざまな文献に目を通すうちに遺骨収容に興味を持つようになった。まずは遺骨収容に関する経験談を読んでみたが、何を読んでも具体的なイメージが掴めない。それなら実際に参加してみようというのが、JYMAに入団したきっかけである。そのため特に戦史について学んだこともなく、恥ずかしながらアンガウル島という地名さえ聞いたことがなかった。

さて、JYMAの団員として遺骨収容に参加する際、事前に活動地域の戦史に関する勉強会が開かれるが、それに加えて事前に読んでおくと良い本を教えていただきたいと当団の理事長にお願いした。そこで薦めていただいた1冊に、船坂弘氏の『英霊の絶叫』があった。

船坂氏は苛烈なアンガウル島の戦いを生き抜いた大日本帝国陸軍の元軍人だ。瀕死の重傷を負いながら戦い続け、手榴弾による自決を決意するも不発。その後左頸部を撃たれ戦死と判断されるも、3日後に米軍野戦病院にて蘇生。致命傷を負いながらも決死の覚悟で戦い続け、自ら命を絶とうとしても運命の悪戯かのように生き永らえ、ついには日本への生還を果たした船坂氏。彼の「生きる力」、そして「生かされる力」に畏怖の念を抱いた。

また、船坂氏による詳細な記述を読んだことによって、ヒナンバでの遺骨収容の際にはその地で戦った兵士たちの姿が眼前に浮かぶような感覚を覚えた。ヒナンバは尖った岩が多く、足場が悪い。移動するだけでも怪我をしてしまいそうなジャングルにおいて、ボロボロになった軍服だけを見に纏い、負傷や飢えに苦しみながら、必死の思いで最期まで戦い続けた勇敢な兵士たち。故郷から遠く離れた地で命を落としたり、ともに戦ってきた戦友を失ったりすることは、どれほど孤独で寂しいことだろうか。

このように考えを巡らせることは、戦争経験のない、戦争経験者から直接的にその経験を継承してもらう機会もほとんどなかった私たち若い世代にとって、戦争の恐ろしさや平和の有難みを実感するのに役立つと思う。今後も本や遺骨収容への参加を通して、戦争や平和について真摯に考えていきたい。

この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

各団体の慰霊参拝

甲飛喇叭隊（5.8.6）

安城市遺族会（5.7.13）

岡山県遺族会（5.7.13）

大阪府遺族連合会（5.8.14）

石川県遺族連合会（5.8.14）

解脱会（5.8.14）

埼玉県遺族代表団（5.8.14）

青森遺族連合会（5.8.14）

鹿児島県遺族連合会（5.8.14）

佐賀県遺族会（5.8.14）

福岡県遺族会（2）（5.8.14）

福岡県遺族会（1）（5.8.14）

霊友会本部（5.8.15）

大分県遺族連合会（5.8.15）

宮崎県遺族連合会（5.8.14）

◎奉仕会年度会費納入者（団体・個人）（敬称略、順不同）

齋藤　準、落合健次、ワン・ヤンラン、横山則義
芦澤　博、白鳥正敬、土師野良明、小林まゆ、諏訪和也
田中延享、小黒俊之、岩田司朗、村田克彦、福田文治
矢野　享、勝見登志子、村田　陽、佐々木弘正、佐々
木三知夫、本橋邦夫、山下秀子、秋元紀子、奥村哲生
名古路彰、野田安平、柚木文夫、加藤園栄、髙橋信行
杉浦涼子、土肥俊峯、吉田一郎、中西一郎、綿貫雄介
坂田鎮厳、御園生和彦、小嶋ゆみ、荒川　勉

◎奉納、参拝団体・参拝者（敬称略、順不同）

クラスノヤルスク遺族会、浦和市遺族会、八幡浜市遺族会、木更津市遺族会、長崎県連合遺族会、蒲郡市戦没者慰霊奉賛会、普明会教団、真言宗護國派、妙智會教団、阿含宗、水交会、全国警親会連合会、小笠原正二・広み、廣川貞雄、廣川剛秀、濱　敦司、前坂泰正
水谷敦司、千本倖生、山本勝久、秀平良子、名古路彰
酒井治雄、宇佐美光男、原　忠邦、中村時男、藤原淑子
竹本佳徳、波多野勇、坂田鎮厳、佐藤律子、高篠重由
プラピチャヤ・プロマス

◎新入会員（敬称略、順不同）

前坂泰正、材津裕治郎、大熊克昌、千本倖生、藤井隆、大場　綜、神山聖子、西山良正

◎参拝団体（前項以外、敬称略、順不同）

天理市遺族会、和歌山県伊都郡遺族連合会、岡山県遺族連盟、鉾田市遺族会、安城市遺族会、綾瀬市遺族会、西尾市遺族会、御前崎市遺族会、千代田区海洋少年団、喇叭伝承会、喇叭保存会、横浜市金沢区歩こう会

◎清掃奉仕（敬称略、順不同）

阿含宗清掃奉仕会、トイレ清掃奉仕会、桜晴れ清掃奉仕会、岩浅博之

◎献花台奉仕者（敬称略、順不同）

古流桜会（関上理好、清水理冷、本加理典、岡田理佳）、柴山古流・縁山流（沼田冷笑、奥島冷恵、古川冷京、菊地冷瞳）、都古流一孝会（内田一孝、内田空良湯浅共子、山中一里）、和光古流（髙橋理淳、汐満理和）池坊宝生流（長谷川一翠、大澤勝風）、柴山古流・縁山流（濱中冷雅、濱田冷園、北川冷智、高畑冷恵）日新流（小田切博新、佐藤寿新）、未生流（谷口信甫磯村悦甫、里村紀甫）、松風花道会（中川玲水、田中恵水）

令和5年7月31日まで受付分を掲載、8月1日以降受付分は次号に掲載します。

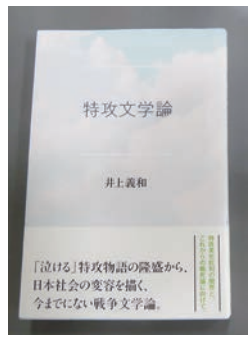
この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

亡き父の遺品「万年筆」が命日にご遺族へ戻る

6月12日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑休憩所において同環境省管理事務所職員齋藤宜明さん他が2月沖縄県豊見城市にある旧海軍壕で遺骨収集活動中に偶然発見した万年筆を東京のご遺族へ返還した。万年筆には「宮本」のお名前と会社名が彫られており、ご遺族にたどり着くことができた。宮本さんの出征時、坂下（旧姓宮本）さんは5歳で皇居の二重橋で見送った父の姿が最後となった。沖縄で戦死したことは承知していたが、ご遺骨は見つからないままであった。身に着けていた持ち物で残っているものは、78年の歳月を経て返還された「この万年筆だけ」という。連絡を受けた時、驚きと同時にうれしさが込み上げてきた。「よっぽど帰りたかったのね」と、亡き父に思いをはせる。坂下さんは、時折、目を潤ませながら感慨深そうに万年筆を手に取っていた。発見に携わった齋藤さんに「宝物です。これからは抱えて寝ます」と表情を緩めた。齋藤さんは今も多くの遺骨や遺留品が眠る沖縄に時間を見つけて赴く予定と語り「一人でも多く見つけたい」と語った。この日は宮本さんの命日にあたるといい、坂下さんはじめ発掘に取り組んだNPO法人「空援隊」関係者も「巡り合わせだなぁ」と感じていた。沖縄戦の終結から78年、遺骨収集の現場には「終わらない戦後」がある。沖縄県の壕には、今も多数の遺骨と遺品が埋まっている。

齋藤さんは次のように語った「私は常々どうして遺骨が残っているの？　何で命を懸けて日本を守ってくれた方々をほおっておくの？　と今の子供たちから質問されたら……何も言えません。もし、遺骨収集にご興味がある方は私までご連絡ください。今も暗く冷たい場所で待っている多くの人々がいらっしゃいますから」（沖縄タイムス6／13抜粋）

推薦図書「特攻文学論」井上義和著



本書によると、最近「永遠のゼロ」、「青空に飛ぶ」等が話題となった。先行き不透明な司法試験浪人生やいじめに苦しむ中学2年生が、個人的なきっかけから「ある特攻隊員が何を思い、どう生きたか」を調べていく物語である。文学的な評価はともかく、どちらも現代の悩める若者が特攻隊員の人生に触れることで、気づき、考え、そして変わっていく。その自己変容の過程に強制的に巻き込むのが、現代の若者が特攻隊員になったり、特攻隊員が現代にあらわれたりといった、時間移動や入れ替わりの設定を軸にした作品群である。特攻の歴史に触れた若い主人公が変容するという自己啓発寄りの興味と時間SFのような条件設定への興味などが混在していたと言える。これから戦争体験者がいなくなり、戦争体験の継承はどうなるのか。本書は特攻美化批判の限界とこれからの戦死論に向けて提起するものである。奉仕会の推薦図書として是非ともご一読をお勧めする。

（定価1、980円、創元社）

墓苑便り（奉仕会だより）

1　9～10月献花の予定

草翠流　林　草翠
松葉流古流　田中　一秀
美風池坊　小島　美陽
古流松静会　石井　理顕
駿東流　小泉　恵華
柴山古流・縁山流　井上　冷美
五十鈴古流一暁派　蟹江　一艸
古流正華道　芦沢　千啓
京葉古流　小浦　一條

2　令和5年度秋季慰霊祭について

当奉仕会主催の秋季慰霊祭を次のとおり開催します。

日時　10月18日（水）13時から

行事内容　各種奉納行事（献茶、御製奉誦、唱歌奉唱等）、自衛隊の部隊拝礼

案内状（はがき）は、東京都、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨、長野、静岡の各県に在住の会員の皆様にお送りします。また、他地域に在住の会員で参列をご希望の方は、はがきに住所、氏名、電話番号を明記の上、9月30日（必着）でご投函下さい。

今回の秋季慰霊祭では、会員以外の方の参列はご遠慮頂いております。

【お詫び】

広報紙7月号（第562号）の一面に掲載した法華宗（本門流）宗務院戦没者慰霊法要の記事において、金井孝顕宗務院総長のお名前を誤って掲載しました。関係者の皆様にはご迷惑と不快な思いをさせ、誠に申し訳ありませんでした。ここに謹んでお詫び申し上げます。

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。

移動採血車
全国各地で運行している献血バスを寄贈

ベンチ
全国の公園緑地等にベンチを設置

フラワープランター
観光地の環境美化活動の推進を目的として寄贈

宝くじ桜
日本全国にさくら若木を寄贈

車いす
博物館利用者のために車いす等を寄贈

一輪車
体力つくり実践校等に一輪車を寄贈

バス停留所施設
バス停上屋と風防施設を設置

すこやか広場
こどもの国（神奈川県）に健康器具や遊具を設置

検診車
胃部・胸部X線撮影車として寄贈

宝くじは、少子高齢化対策、災害対策、公園整備、教育及び社会福祉施設の建設改修などに使われています。

一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。
一般財団法人 日本宝くじ協会
https://jla-takarakuji.or.jp/

この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。